

たので、いい本が出たら、すぐ読み聞かせ、子どもたちの反応を見ていました。コロナ禍では、離れて読むので、遠目の大きく本をさがしますが、最近の絵本は、そういう本はほとんどないです。背景がこまかく描かれていたりして……。その点やはり福音館書店の昔ながらの絵本、赤羽末吉さんの本とかこどものとも傑作集とかはいいなあと改めて気づいた年でした。

土居 大阪国際児童文学振興財団の土居です。最近では巖谷小波の絵葉書を読み解く研究などもしつつ、新刊を読んで紹介する活動もしています。去年は、コロナ+ロシアのウクライナ侵攻+電子書籍の増加+気候変動+性の多様性やバリアフリーの問題、など社会の変化が子どもの本にも影響しているなど感じています。

川嶋 私は、滋賀県の小学校二校の学校司書を兼務しています。去年のことでは、年があけてすぐ松岡享子さんが亡くなられ、その後、こぐま社の佐藤英和さん、山脇百合子さん、三宅興子さん、松居直さんと、これまで児童図書サービに携わった中で、たくさんの教えをいただいた先生方が亡くなるというショックな年でした。あらためて、受け継いでいかななくてはいけないと感じました。

大島 私は、埼玉の文教大学教育学部国語専修の教員をやっています。主に宮沢賢治作品の研究をしています。最近は、コロナ禍で学生が変わったと感じています。チームワークが苦手で、自尊心の低下がみられます。また中学でも、不登校の子どもが増えていると聞きます。リモート授業が多いので当然かもしれませんが、もうひとつは、やはり戦争ですね。始まってしまうと、情報が限られていく。戦争を語るのが難しいと痛感しています。

「いのち」を考える絵本

——では、まず絵本についてふりかえてみたいと思います。代田さんは、読み聞かせなどで絵本をたくさん読まれているとのことですが……。

代田 今回私が注目した作品は、集団への読み聞かせには向かないと思いますが、心に残った本です。まず、『ゆきのげきしよう』。お父さんの大事な図鑑を破ってしまった男の子がおもわず雪山の中に出て行ってしまふ。それで、穴に落ちるとそこには不思議な劇場があつてと、フ

話題にしたい本①

大島文志

『もじもじきたべられるはく』（はせがわゆうじ作、中央公論新社）
『橋の上で』湯本幸樹美文、酒井駒子絵、河出書房新社
『ひみつのだ』(岩崎成子著、岩崎書店)
『紅の魔女』(小森香折作、偕成社)

川嶋智美
『ゆかしたのワニ』(ねじめ正一、文・コマツシンヤ絵、福音館書店)
『戦争をやめた人たち』(鈴木まもる文・絵、あすなろ書房)
『なりたいたわし』(村上山一、作・フレールベル館)
『スクラッチ』(歌代朝作、あかね書房)

代田知子

『ゆきのげきしよう』(荒井良二作、小学館)
『橋の上で』(同)
『ニッキとウイエラ』(ピーター・シス作、福本友美子訳、BL出版)
『なまむしせいとく』(たじまゆきひこ作、童心社)
『ゆめでもい』(あまみきみこ作、黒井健絵、ポプラ社)
『ひみつのだ』(同)
『ペランダのあの子』(四月猫あらし作、小峰書店)
『いのちの木のあるところ』(新藤悦子作、佐竹美保絵、福音館書店)
『シリアからきたバレリーナ』(キャサリン・ブルートン作、尾崎愛子訳、偕成社)
『チャンス』(ユリ・シユルヴィツ作、原田勝訳、小学館)
『エーリッヒ・ケストナ』(クラウス・コルドン著、ガンツェンミューラー文字訳、偕成社)

土居安子

『ゆきのげきしよう』(同)
『はだしであるく』(村中季衣文、石川えりこ絵、あすなろ書房)
『いのちがかえっていくところ』(最上平文、伊藤秀勇絵、童心社)
『和らぐそくは、つなく』(天西暢夫著、アリス館)
『スクラッチとウイエラ』(同)
『ニッキ』(同)
『ぼくたちはまた出逢つてない』(八束登子作、ポプラ社)
『ジャンクルジム』(岩瀬成子作、ゴプリン書房)
『チャンス』(同)
『消えたソナタホテルの支配人』(ジョン・ミョンソソブ作、北村幸子訳、影書房)